2．広報活動としての「行事・集会」

小田中徹也

1．はじめに

図書室の広報活動としては、いわゆる「館報」の発行、コンテンツ・サービス、新着図書案内、新入職員や学生のためのオリエンテーションなどが一般的に行われている。こうした活動は積極的な利用者開発の有効な手段となり得るが、その継続は日常業務の中でなかなか困難なケースが多いようである。その理由として効果の評価が難しいこと、また担当者一人では受入、整理、貸出、検索などの基本的な図書館業務に大半の時間を割かれてしまうことが考えられる。

ところで、公共図書館では「行事・集会」活動として講座、講演会、読書会、展示・展覧会、音楽会、人形劇などさまざまなイベントが企画されているとのことである。『図書館ハンドブック』ではこうした「行事・集会」活動は“資料提供の活動を軸として、その活動を一層推進させるために実施”することに意義があり、“未利用者層を図書館にひきつけ、利用者に転化”させたり、“読書の内容を深めたいとの要求”に応えていく機会や場の提供の役割があるとしている。さらに“参加者を何名得られたかなど量的問題以上に何が展開できたか”に関心が注がれるべきであるとしている。

私の図書室では、以前に手書きの図書館報を発行していたものの不定期になり、ついにその継続が困難になり中断してしまった経験がある。その他に広報活動としては毎年6月研修医、レジデントのための病院オリエンテーションの中で図書室を簡単に紹介する程度である。一方、図書室を頻繁に利用する人々の間では読書に関連する企画の要望があり、また既にある科で持たれていた英会話を図書室で受け持ってほしいとの意向も聞いていた。

そこで図書室の存在感を職員に印象づけ利用を促す方法としての企画的活動にこれらを生かしていくことを考えた。読書会と英会話サークルは図書館にふさわしい内容であり、参加者も楽しく企画側の準備も容易であったことから長期に継続し好評であった。広報活動としては、本来、案内掲示、館報やパンフレット、年報、目録などの出版物などが考えられるが、ここでは「行事・集会」活動の例を紹介してその広報PR的側面を考えてみたい。

2．例(1)：読　書　会

［経過］　1978年7月、院外の有志も含め4名で第1回読書会を図書室で開く。図書室としては積極的に読書に関連する活動の場を提供していくことになり、以後1982年2月の第17回読書会まで約4年間2ヶ月に一回を原則に読書会を開催した。

［方法と内容］　対象テキストは参加者の推薦で次回分を決め、読書会当日には各自の読後感や批評、関連事項を紹介する。同一書を各自がいかに異なってまたは共通して読み分析するかを知ることに主眼を置き、統一的な結論は求めない。参加と読後考察の文章化については積極性を要望したが自由とした。また、テキストの範囲についても特に限定しなかった（使用テキスト一覧参照）。毎回土曜日の午後に開き、登録メンバーと希望者には案内状を出すとともに図書室内で案内した。出席者は最低2名、最高10名で毎回の平均は4.3名であった。

［使用テキスト］　回、書名、著（訳）者、出版社　を表示。

①「日本人の死生観（上・下）」　加藤周

こだなか　てつや：国立京都病院図書室

一他　岩波新書

②「舞姫」、「半日」　森鷗外　岩波文庫他

③「イエスの生涯」　遠藤周作　新潮社
「余は如何に基督信徒となりし乎」　内村鑑三　岩波文庫他

④「ファン・アイク；ゲントの祭壇画」
E．ダネンス　黒江光彦訳　みすず書房

⑤「背教者ユリアヌス」辻邦生　中央公論社

⑥「果てしなき探求ー知的自伝」　K．ポパー　森博訳　岩波現代選書

⑦「科学技術とは何か」　佐藤進　三一書房
「最近10年の科学と社会(V)ー反科学と科学批判ー」　中山茂　科学、49(6):389−395,1979

⑧「トオマス・マン短編集」実吉捷郎訳　岩波文庫

⑨「妹の力」　柳田國男　角川文庫

⑩「『甘え』の構造」、「『甘え』と社会」
土居健郎　弘文堂

⑪「幼児期と社会Ⅱ」　E．H．エリクソン　仁科弥生訳　みすず書房

⑫「生きがいについて」　神谷美恵子　みすず書房

⑬「遙かなノートルダム」　森有正　筑摩書房

⑭「中世の窓から」　阿部謹也　朝日新聞社

⑮「アベラールとエロイーズ　ー愛と修道の手紙ー」　畠中尚志　岩波文庫

⑯「東山時代に於ける一縉紳の生活」　原勝郎　講談社学術文庫（または筑摩叢書）

⑰「我と汝・対話」　マルティン・ブーバー
田口義弘訳　みすず書房

［考察］　(1)　院内からの参加者は読書の負担があるため少数ではあったが、取り上げるテキストについては図書室利用者にも広く興味をもたれた。(2)　院内はもとより院外にもオープンにしたため多彩な参加者を得ることができ、また開かれた図書館活動として広報の意義も深かった。(3)　特別な目的、統一的な結論、厳しい規則などを求めなかったため、自由な雰囲気で長期間継続し、図書室の読書会として徐々に院内で知られるようになった。(4)　費用はテキスト購入代のみ各自の負担としたが、会費を設定して茶菓を充実すれば長時間の会がより楽しくなったと思われる。

小田中徹也氏

3．例(2)：英会話サークル

［経過］　1978年秋に耳鼻咽喉科の英会話勉強会が図書室主催の英会話サークルに移管。院内にオープン化して図書室内に参加者募集の案内。5名の参加からスタートして会員制で運営。1987年6月、当時の講師がフロリダに帰国して中断し今日に至る。

［方法と内容］　毎週水曜日17時〜18時30分にNative Englishの外国人を講師に招き英会話のFree Talking。Topicsの材料として英字新聞や雑誌などの記事を準備して話題に広がりを図る。講師への謝礼は会員で分担、1人毎月約3,000円から4,000円を徴収。毎回3〜6名の参加。親睦と会話力向上のため講師を招待して英会話による夏の納涼会と冬の新年会を開く。

［講師と参加者］　講師：カナダ人2名（日本、フロリダ在住）、アメリカ人3名（日本、カリフォルニア、NY在住）、イギリス人

1名（イギリス在住）の延べ6名が短くて1ケ月から長期で4年間、講師として来院した。

参加者：耳鼻科、皮膚科、小児科、眼科、麻酔科、脳外科、外科、歯科、看護部から計16名が参加し、平均7～8名の会員数で維持された。

［考察］ (1) 「図書室の英会話」として院内で広く知られ、中断後の現在も院内はもとより院外の退職者からも時々問合わせがあることは図書室の広報活動として充分に意義があったと思われる。(2) 閉鎖的になりがちな部科間の交流が、英会話を媒介として促進され医療の情報交換にも益する結果を生んだ。(3) 英会話を院内で習得できることにより多忙な職員の時間的節約となった。(4) 財政的に個人負担としたため、一定以上の会員数の確保が常に課題となった。

4．ま と め

(1) 図書館の広報ＰＲについて、利用方法や新着書の案内は病院図書室でも必須のこととして掲示や配布による方法で一般化している。

(2) 館報の発行やコンテンツ・サービスなどの直接的な広報活動はさらに効果的だが、病院図書室では担当者の負担が大きく継続は困難な場合が多い。

(3) 病院図書室においては担当者の負担が少なくても参加者の興味深い企画活動なら図書室活用の面からもＰＲ的にも効果的と思われる。

(4) 読書会と英会話サークルは少規模な集まりが利点であり、過度な義務や負担もなくて知的興味や実利性も高いことから長期に継続した。これが図書室の存在感をアピールする結果となった。

(5) 業務とは離れた趣味的企画であるため勤務時間外の活動として割り切ることが必要で、参加もしやすい。また経費も自己負担とするが、参加人数には影響しないと思われる。

(6) 公共図書館や大学においても講演会、展示会、映写会やオーディオ・コンサートなどそれぞれの方法で企画行事が行われており、図書館の間接的な広報ＰＲ活動としての意味を持っている。

3．利用環境（利用条件）について

長谷川湧子

1．はじめに

利用環境を整えるということは、利用しやすく、機能的で快適なスペースを利用者に提供することであり、利用環境を一定の水準にするということは、サービス内容の充実と共に利用者を図書室に惹きつける要因であると考える。しかし、病院図書室の現状は、「衣食足りて礼節を知る」の諺を借りれば、衣食＝施設、図書の予算も少なく（足りず）、日々の業務に追われ、どうしたら礼節＝機能、快適さを求めたらよいか思案しているという状況ではなかろうか。Hazyな要素も含む利用環境を「衣食は足りずとも」どのように整備していったらよいか、どのような点に留意したらよいかを考えたい。

はせがわ　ゆうこ：関東逓信病院図書館

2．利用環境を考える上でのポイント

(1) 利用者の行動パターンを掴んでおく

利用者の基本的な行動の動線を、しっかりと認識しておく。閲覧、書架の配置、カウンターでの手続きなど、どういうパターンで利用者が行動するか、どういう行動の選択をするか、本や物をどのように移動するか等ということであ